

**田岡化学工業株式会社**  
**2020年3月期第2四半期 決算説明会 質疑応答要旨**

当社説明者

取締役社長

佐藤 良

専務取締役事業支援室長

田岡 信夫

質問1

当期の業績予想では下期に増益することになっているがその理由は。また主力製品である樹脂原料、ワニス、タイヤ用ゴム薬品をどう見ているのか。

回答

ゴム薬品は、米中摩擦の影響を受け楽観視できず下期回復は難しいと予想している。樹脂原料とワニスは、上期は予算の想定通りに進捗し、下期についても予算通りに行くと考えている。上期に比べて下期の増益は上期の工事休止による操業度差損が下期にはないためである。

質問2

iPhone が三眼になっており、超広角と望遠レンズが加わった。Sony の画像センサーも高画素化している。ハイグレード化が進んでいる中で、御社がこういった形で貢献をしているのか。御社の樹脂原料が使用されているのか。

回答

弊社のお客様が樹脂にし、レンズにするのはさらにその先のお客様であり、そのような用途に使用されているかどうかはわからない。弊社の供給している樹脂原料は高屈折率かつ低複屈折ということで、薄型のレンズの製造に貢献できる。

質問3

三菱ガス化学は樹脂の生産能力を 3000T から 5000T に増やしたが、御社の売上也これについていくという理解でよいか。

回答

大口の需要家で弊社のシェアもあり、それを失わないように当然追随して伸ばしていきたい。

質問4

短期的な対策で、ある程度の増産はできるのか。

回答

弊社は複数のグレードを供給しており、複数のマルチプラントで樹脂原料を作り分けている。それ

それぞれのプラントの設備の差、それぞれのグレードの生産性の差もあり、生産計画を最適化することによって増産できる。

#### 質問 5

ワニスが EV やハイブリッド車向けに伸びていくということだが、この分野の難易度はあるのか。他のワニスとの違い、御社の差別化・競争力は何か。

#### 回答

ワニスは基本的には受託事業であり、品質の違いや特徴は顧客の情報である。弊社には守秘義務がある。いかに弊社がうまく物作りをし、顧客の必要量を供給するかということが重要である。

#### 質問 6

樹脂原料に関してスマートフォンのバリューチェーンの中で御社は川上にいるが、それでレンズの品質について影響が与えられるのか。

#### 回答

樹脂原料(モノマー)はかなり上流のものである。モノマーの物性はポリマーの物性のかなりの部分に反映するため、高屈折率のレンズを作るのに、弊社の供給している樹脂原料(モノマー)は役に立っている。

#### 質問 7

もともとの背景と強みを教えてほしい。御社のどういうコア技術が生かされて今に至っているのか。

#### 回答

顧客に弊社の提案したものを評価してもらったり、顧客が提案するものを弊社が合成して提供したり、そういうキャッチボールの中で製品を作りあげていけたことだと考える。

#### 質問 8

他社製造設備の活用とは。他社が簡単にできるようなものなのか。

#### 回答

弊社には特許で裏打ちされた製造法、またノウハウがあり、そういうものを他社の設備を使わせてもらってやるという形にすれば、自社で設備を新たに作らなくても製造できるし、それらはすぐに他社が模倣できるようになるものではない。

#### 質問 9

新多目的製造設備はこの樹脂原料用途以外にも検討もされているのか。

回答

弊社の樹脂原料に専用工場はない。多目的工場では基本的にいろいろなものを作り分けることができる。生産する樹脂原料も1種類ではなく、一つの製品しか作れない工場ではない。有機化学品をバッチ生産をしている会社の特徴である。

質問 10

現段階では新製造設備投資の意思決定をしていないのか。

回答

会社としての意思決定はまだしていない。そういうレベルにはまだ至っていない。中期計画においては、もともと新多目的工場を織り込んで計画しており、継続して検討中である。

質問 11

顧客の必要量に対するリードタイムはどれくらいか。

回答

営業が日々それを前広に頂くように対応している。情報として確定計画ではない段階で情報を頂いたうえで、いろいろな設備計画を準備するという活動はやっている。

質問 12

樹脂原料のグレードによる収益性の差異はあるのか。

回答

マルチプラントなので、プラントの固定費をどの品目に持たせるかで収益性は計算上変わる。いろいろなものを作るため一概には言えないが、多少はある。

質問 13

他社生産設備で作っているものの割合はいかほどか。収益性は下がるのか。

回答

回答できない。

質問 14

グラフェンナノリボン量産化に、御社の投資のイメージはあるのか。

回答

研究が端緒についたばかりでなんとも言えない。工業的に量産化する事業化・実用化を論ずる段階に至るまでにまだ課題がある。先端材料を有機合成反応で作れるようにした素晴らしい研究で

あるが、研究室でミリグラム・グラム単位で三角フラスコで合成する研究レベルと、キロ・トン単位での工場の釜での試製造のレベルとではまだ相当ギャップがある。投資を議論する段階ではない。実際どんな投資が要るかはこれからの研究の進展に応じて決まってくる。いつごろどれだけいるかというのは今の段階では不明である。

(以上)